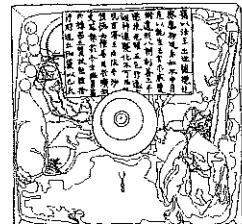


播磨の古代寺院と造寺・知識集団 3

智識寺・河内六寺と知識集団

寺 岡 洋



益山弥勒寺出土 舍利具

聖武天皇が見た智識寺

生駒山の西麓、大和川が亀の瀬の山峠を抜け河内平野に出たあたり、天平時代には智識寺（ちしきじ）の大伽藍が聳えていたであろう。現在の柏原（かしわら）市域になる。往時、智識寺は盧舍那仏（るしゃなぶつ）が広く知られていたようで、また、寺名のように多くの人の知識（智識）によって建立された寺としても著名であったようである。

聖武天皇は天平12年（740）、難波宮に行幸した際に智識寺を訪れ、「河内国大県（おおがた）郡の智識寺に坐（ま）す盧舍那仏を礼（をろが）み奉りて、則ち、朕（あれ）も造り奉らむ……」と、発願したことが明記される（『続日本紀』天平勝宝元年（749）12月条）。智識寺の存在と、盧舍那仏を見たことが、東大寺の盧舍那仏（大仏）造立の契機になった逸話である。

そして天平15年（743）、紫香楽宮での大仏造立発願の詔には、「盧舍那仏の金銅像一軀、……朕が知識となす。……如（も）し更に人の一枝の草、一把の土を持ちて像を助け造らんと情願するあらば、恣（ほいいま）にこれを聽（ゆる）せ」と、知識による造像を強調している。行基法師も「弟子らを率いて衆庶を勧誘す」とある。

天平勝宝元年（749）、天皇に即位した孝謙は茨田宿禰弓束女（まんだのすくねゆつかめ）の宅を行宮（あんぐう）にして智識寺に行幸した。先帝の意思を引き継ぎ、大仏造立を進めることを報告したのではないか、と想像される。この時、「河内国の寺六十六区の見住の僧尼・沙弥（しゃみ）・沙弥尼……」があるので、8世紀中頃、河内国には少なくとも66ヶ所の寺があり、僧尼などが居住している。

天平勝宝八年（756）2月には、孝謙天皇、譲位した聖武、光明皇太后が、智識寺南行宮と河内離宮に宿泊し、智識寺など六寺を訪れている。大仏は完成していないが、開眼供養の報告・お礼参りであろうか。聖武はこの後、日を置かず亡くなる。

智識寺と河内六寺について

このように智識寺は、大和や河内にある数多の寺の中にあって聖武・孝謙天皇に深く帰依されたが、何故なのであろうか。それは、智識寺が多く人の知識（智識）により建立された寺であったことが、聖武に大きく影響したと考えられている。

知識集団によって造られた智識寺という寺の在り方と、大県（おおがた）郡に臺を並べていた河内六寺の景観については、播磨の古代寺院を考える際に多くの示唆を与えてくれる。

智識寺と河内六寺について、安村俊史氏の論文等によりみてみたい（『智識寺についての覚書』『柏原市立歴史資料館 館報』20 2008年、図録『河内六寺の輝き』柏原市立歴史資料館 2007年）。

智識寺を含む河内六寺については、それぞれ古代寺院跡が比定されており、各寺院は古道に沿って400~500m間隔で建立されている。孝謙天皇が巡拝したコースは、智識寺南行宮から北へ、智識寺（太平寺廃寺）→山下寺（大県南廃寺）→大里寺（大県廃寺）→三宅寺（平野廃寺？）、ここから南に戻って家原寺（安堂廃寺）→鳥坂寺（高井田廃寺）。その間に、茨田宿禰弓束女の居館、津積駅家（つみのうまや）などが建つ景観であった。

智識寺に比定される太平寺廃寺は柏原市太平寺の集落内にあり、東塔跡の一部が発掘調査されているが、金堂・講堂・回廊等の遺構は不明。塔を東西に備えた双塔の薬師寺式伽藍配置になる。

東塔の規模は非常に大きく、二重基壇（重成基壇とも）の推定一辺長は20.8mにもなり、河内国分寺の七重塔（約19m）の基壇を凌ぐ規模になる。平城薬師寺西塔の基壇長は13.65mであるので、智識寺は壮大な伽藍であったであろう。

聖武が拝礼した智識寺の盧舍那仏が東大寺の大仏と同様に黄金輝く金銅仏であったか、それとも塑像であったかは、現在、確認されてない。

智識寺の創建年代については瓦の編年から、7世

紀中葉～後葉と考えられている。この年代は、日本に薬師寺式伽藍配置を初めて導入したとされる、藤原京跡に残る本薬師寺の推定創建年代（文武二年・698）より早く、最初期の双塔式伽藍になる。年代は動くかも知れないが、いずれにせよ、最先端の伽藍配置が河内に導入されることになる。

新羅の双塔式伽藍

朝鮮半島での双塔式伽藍の初見は、新羅文武王19年（679）、慶州（金京）に創立された四天王寺と考えられている。異見もあるようだが、現在、発掘調査が進められており、より明確になるであろう。文武王と海龍伝説で知られる感恩寺も早い時期の双塔式伽藍で、『三国遺事』によれば、神文王2年（682）に完工している。木塔ではなく石塔。

新羅における双塔という類例のない伽藍配置の採用については、670年、唐で華厳を学び帰国した義湘（ぎしょう）が関わったのではないか、ともいわれる。長安で見た最先端様式の双塔でもって寺院を莊嚴したというものである（山本栄吾「双塔式伽藍配置の発祥と伝播」『建築史研究』40 彰国社 1976）。新羅を代表する寺院といえば皇龍寺であるが、まだ単塔式であり、高さ80mにもなる九層塔は善徳王十五年（646）に完工している。

ちなみに、播磨の古代寺院も双塔式伽藍の寺院が多いのが特徴の一つに挙げられている。

家原里（邑）の知識集団について

智識寺はその草創の経緯を知ることができないが、寺号のように知識による造営と考えられる。そして、その知識集団には渡来系出自の人が多く加わっていたと類推できる資料が残る。

智識寺の南隣りには家原寺（安堂廃寺）があったが、同じ家原を地名にする家原里の知識集団による河内大橋改修と大般若經の写経である。以下の論文により紹介したい（『柏原町史』1955年、井上正一「奈良期における知識について」『史家』第29号 関西大学史学会 1964年、薗田香融「知識と教化—古代仏教における宗派性の起源—」『国史論集』赤松俊秀教授退官記念会編 1972年）。

医王寺（和歌山県）旧蔵の大般若經には写経の縁を記した願文（がんもん）が残り、そこに家原邑・家原里が記されることから、「家原里知識経願文」

とも呼ばれる（知識経は知識による写経の意）。

奥書「願文」によれば、家原里の人を中心とする知識集団は、河内六寺の西を流れる大和川に架かる河内大橋の改修と並行し、大般若經20巻の写経を進め、天平勝宝六年（755）に完成したようだ。現在、5巻のみ知られるが、知識に結集した8名の名前が残り、うち5～6名は渡来系出自と思われる。願文を有するのは2巻のみで、「奉仕知識」と明記される（*印 願文の残る巻）。

	卷 数	氏 名	居住地
*第421巻	伯太造	畠壳	河内国安宿郡伯太里
*第425巻	牧由忌寸	玉足壳	不詳
第426巻	私若子	刀自	河内国大県郡家原里
第429巻	文牟史	広人	河内国大県郡家原里
//	物部	望麻呂	河内国安宿郡か？
//	下村主	弟虫壳	河内国大県郡
//	文牟史	玉刀自壳	河内国大県郡家原里
第430巻	馬首	宅主壳	河内国伎人郷？

渡来系出自とみられる氏名を挙げると、伯太造（はかたのみやつこ）は百濟系の田辺史（ふひと）の一族。牧由忌寸（いみき）については、渡来系に忌寸姓が多いが？ 文牟（ふみむ？）史は西文氏（かわちのふみうじ）の一族であろうか。史は渡来系の姓。下村主（しものすぐり）と馬首（うまのおびと）は歴然としている。

今井啓一氏によれば、この他、秦伊美吉（はたのいみき）乙麻呂、林連（はやしのむらじ）白刀自女の名も見える。時代が下るが、大県郡の北隣である高安郡に所在する教興寺（秦寺、高安寺とも）の鐘の施主には、「坂上、葛井、菅野、山口」などの渡来系氏族の名がみられる（『河内国智識寺』『百濟王敬福』総芸舎 1965年 p87～92）。

また、河内六寺の大里寺（大県廃寺）跡からは「大里寺」と墨書きされた土器が出土しており、渡来系の大里史が関係する寺と推定されている。大里寺一帯は古墳時代後期、日本列島での最大規模の鉄闕連遺跡である大県遺跡が立地する（『河内六寺』柏原市立歴史資料館 1995年）。鍛冶闕連は言うまでもなく、渡来系工人集団が担っていた。

ところで、河内大橋は周辺地域に大きな利便をもたらすものであり、家原里（邑）のみの知識で改修されたとは考えられない。家原里は8人で5巻の写経を担当しており、仮に大般若經600巻を同じ人

数で写経すれば地域で960人の知識が組織されたことになる。智識寺も含め、薦を並べて建立された河内六寺は、このような多数の知識集団の存在抜きには考えられないであろう。

ちなみに、石川の下流域から大和川の合流付近、郡名では志紀（しき）・安宿（あすかべ）・大県（概そ、八尾・藤井寺・柏原市域）には、総数18ヶ寺を数える寺院が存在した（北野耕平「華ひらく仏教文化」『古代を考える 河内飛鳥』吉川弘文館 1989年）。単純平均すれば、一郡に6ヶ寺もの古代寺院が建てられていたことになる。

家原里、益山弥勒寺の願文「竊以」について

「家原里知識経願文」冒頭句（発語）は、「竊以（ひそかにおもうに）…」から始まり、「家原邑男女長幼」が写経に加わったことを記すが、この「竊以」から始まる願文様式が、益山（全羅北道）に建立された百濟最大の寺院である弥勒寺舍利具の願文（奉安記）と同じであるのが注目される。金版に陰刻された「奉安記」は西塔の解体修理で見つかり、今年1月19日、大々的に公表された。

「竊以法王出世……我百濟王后 佐平沙毛積徳女……謹捨淨財造立伽藍 以己亥年正月廿九日 奉迎舍利……」と、百濟王后である佐平（さへい 官職）沙毛（さたく）積徳の娘が淨財を喜捨し、己亥年の武王40年（639）に、舍利を塔に納め弥勒寺が完工したことを記した極めつきの資料である。639年に百濟で用いられた願文様式が倭国に伝わり、一世紀後の天平勝宝六年（755）、河内で使われている。百濟系知識人が関わったものであろう。

ここで、「家原里知識経願文」を見直すと、伯太造畠壳と牧田忌寸玉足壳が書いたものが残る。このうち、伯太造氏は安宿郡の式内社伯太彦・伯太姫神社を氏神とする一族であり、その祭神は田辺史の祖である伯孫（百尊とも）夫妻とされる。

田辺史は、「文書（ふみ）を解（さと）れるを以て田辺史と為れり」（『新撰姓氏録』）と特記されるように、中国の古典に通曉していた。大宝律令（700年）の選定に際しても、田辺史百枝・田辺史首名と二人も加わっている。「家原里知識経願文」は知識集団に結集していた百濟系の田辺史一族の手になるものであろう。史の意は、玉篇（部首別漢字辞典）によれば、「掌書之官」とある。



弥勒寺出土 金製奉安記（表）

「竊以」の用例 梁 → 百濟 → 倭国

「竊以」の用例について、赤坂可奈子氏によれば、初出は漢代から見られ、冒頭句（発語）として用いられるのは六朝期の梁の時代まで下がること。『敦煌願文集』にあって、願文冒頭句として用いられるのは梁の文章形式と同様であり、「竊以……」は仏教的要素の強いものと指摘されている（「億良の文章論理—竊以を中心として（一）」『懐風藻研究』日中比較文学研究会 第6号 2000年）。

中国南朝の梁と言えば百濟と関係が強い王朝で、武寧王陵に隣接する公州・宋山里6号墳（壁画のある塚築墳）からは、「梁の官瓦もて師と為す」と銘文が記された壇（せん）が出土している。

東大寺の「大佛殿曼荼羅織銘」も、「竊以……」の語句が冒頭句に使われている（『寧樂遺文』文学編）。『萬葉集』の極めて仏教色濃い山上億良の漢詩文、「沈痼自哀（ちんあじあいの 文）」も冒頭は「竊以……」。億良の出自は百濟系という説が有力。

「砂宅智積（さたくちしゃく）碑」にみる造寺

弥勒寺「奉安記」の沙宅（沙モ・沙咤・砂宅）氏は百濟の最有力貴族で、文献や金石文に散見する。

- 639年（武王40年） 佐平沙毛積徳
- 642年（皇極紀元年） 大佐平沙宅智積
- 660年（齊明紀六年） 大佐平沙宅千福
- 673年（天武紀二年） 法官大輔沙宅紹明

とりわけ、韓國扶餘博物館所蔵の「砂宅智積碑」には造寺に關わる文言が見られ注目される。

「庚寅の年（654）正月九日、奈祇城の砂宅智積、……金を穿ちて以て弥堂を建て、玉を鑿ちて以て宝塔を立つ。……」とあり、沙宅氏は伝統的に仏教に傾倒し、寺院を建立しているようである。また、沙モ積徳と砂宅智積は親子の可能性があり、であれば智積と王后は兄弟になるかもしれない。（続く）